

夢を諦めかけた漫画家が立ち上がる話

大事な人を、
二駅先に置いてきた

脚本 原田純愛

登場人物

健(31) ……打ち切られた漫画家。無職

綾(29) ……健の恋人。看護師

父(58) ……寡黙な男。老舗の饅頭屋を営む

母(54)

男(31) ……漫画家を目指している仲間

○健、アパート(深夜二時)

健、机に向かって漫画を描いている。
健「今回のネームも、ボツ…か」

手を止め、眉間を揉み、ため息をつく。
スマホに少し触れたのち電話をかける。

健「おめでどう。ラインでいいかと思っただけど、連絡みたら電話したくなかった」

男「ありがとう。なんとか、無事産まれたよ」

健「男？ 女？」

男「元気な男の子。後で画像送るわ！」

健「男か。いいな。こんな夜中に連絡して悪かった。がんばれよ、パパ」

男「おう、おまえもな！」

電話を切り、スマホを伏せる。

男「がんばれよ、か」

スタンドライトをオフにして、そのままベッドに移動する。

綾が眠っている隣に身を寄せ、眠りについた。

○同アパート(朝)

健、目を覚まし、ベッドから上体を起こす。

綾がキッチンから顔を出し、健を見る。

綾「おはよう。朝ごはん、あるけど食べる？」

健「…食べる」

健がベッドから下りると、綾がトレイに食事を乗せてやってきて、折りたたみのテーブルに置く。

健「いただきます。(綾の服装を見て)…今から仕事？」

綾「うん。なんか欠員でちゃったみたいで、でも食べ終わったお皿洗ってから行くよ。それくらいの間ならあるから」

健「そっか。(食べながら)皿は自分で洗うよ。それよりちよっと、話いい？」

綾「…うん。(座る)どうかしたの？ 深刻

な顔して」

健、食べ終わり、箸を置く。

健「あの…さあ、俺、漫画描くのやめるわ」

綾「え」

健「昨日の夜、高校のときから一緒に漫画家目指してた奴が親になつてさ。なんか、俺、なにやってるんだらうって思つて…だせえよな。俺、アイツが漫画家諦めて会社員になるつて言つたとき、めちゃくちゃバカにしたんだぜ？ それなのに、今、俺は新人賞どまりの打ち切り漫画家で、アイツは順調に家庭もつてんの。…俺のほうがダサいつてな…」

綾「そんなことないよ。新人賞だつて、誰でもとれるわけじゃないじゃん。また、次の作品描けばいいんだよ」

健「描いてもネームが通らねーんだよ！（テールブルを叩き、箸が飛ぶ）」

綾、驚いて肩をふるわせる。

健「悪い…。ちよつと、寝不足で、俺…短気になつてる」

綾「うん。大丈夫だよ。ちよつとネガティブになつてるだけだつて。せつかく新人賞とれたのに、諦めるなんてもつたないよ」

健「いや、漫画はやめる。もう三十路だしさ。夢諦めて、現実見るわ」

綾「健ちゃん…」

健「それで、今日、実家に帰るよ。帰つて、親父に頭下げて、実家の饅頭屋継ぐわ」

健、箸を拾い、食器を重ねる。

健「たぶん、めちゃくちゃ怒られる。高校卒業して、夢、カミングアウトしたとき、『漫画で飯が食えるのか！』つて言われてさ。カチンときて『饅頭で夢与えられんのかよ！』つて言い返した。最後には売り言葉に買い言葉で『饅頭なんてクソくらえだ！』つて言つて…それから帰つてないしな。怒られるより、笑われるかもな…」

綾「健ちゃんはそれでいいの？ ずつと、漫画ががんばってきたのに…」

健「いいんだよ。それで。だからさ、落ち着いたら…結婚しよう」

綾「…」

健、綾の手を握る。

健「いままで苦労かけて悪かった。おまえには本当に感謝してる。結婚して、子ども作って、幸せな家庭築こう」

綾、健の手をふりほどき、立ち上がり、背を向ける。

綾「ごめん…。すぐに返事できない…。…もう、

仕事行かなきゃ」

綾、近くにあったハンドバッグを引き寄せる。

健「お、おい」

綾「私、健ちゃんの漫画が好きだった。夢いっぱいで、読んでると胸が熱くなつて。担当さんより、一番先に読めることがうれしかった。…そりゃあ、結婚したい、ふつうに幸せな家庭築きたいって思ったことはあるよ？ けどね、結婚するために漫画やめるっておかしいよ！」

健「なに、ヒステリー起こしてんだよ。俺は、おまえのことを思ってる…」

綾、振り返る。目には涙をためて、健をにらみつける。

綾「夢を諦める口実に、私を使わないでよ！」

綾、目を拭う。

綾「ちよつと、時間がほしいの。…そうだ。実家帰るんだよね？ 五千円あれば足りるかな」

綾はバッグから財布を取り出し、五千円をテーブルに置く。

綾「偏屈な女でごめん…」

健、あつげにとられたまま立ち去る綾の背を見つめ、視線を五千円に落とす。扉が閉まる音がする。

健「なにが不満なんだよ…」

○パチンコ屋

タバコを吸い、パチンコを打つ健。
玉がなくなって、ポケットからお金を
だすも、千円しかない。しわしわのお
札を見つめる。

健「VA『高校のとき、最高の漫画に出会って、
俺は漫画家になることを決意した。こんな
ふうには、俺も誰かに夢を与えたい、その思
いだけで、家を飛び出した。当時、わずか
な貯金しかなかった俺は実家から二駅先の
風呂なしアパートで暮らしていた。昼はフ
リーター、夜は漫画を描き、出版社に持ち
込みに行く日々の中で綾と出会った』

× × ×

○公園、夏

回想。

健（22）、原稿の入った封筒を抱えな
がらベンチで横になり、うめきながら
身を縮ませる。

綾（20）が走り寄ってくる。

綾「大丈夫ですか？」

健「なんか、急に立ちくらみがして……。気分、
悪くなって」

綾、健のおでこに触れる。

綾「熱はないみたい。…水分摂ったのはいつ
頃ですか？」

健「今日…なんも飲んでないかも…」

綾「汗もすごいし脱水症状かも。…ちよっと
待っててください、水買ってくるんで！」

○（数分後）公園

ベンチに並んで座り、笑い合っている。

綾「すごい。漫画描いてるんだ〜」

健「いや、あんたのほうがすごいよ。看護師
とか、人の役に立つし。現に俺、助けられ
たもんな。ホント、助かったよ」

綾「えへへ、まだ看護師志望だから。なれる
かどうかもわからないし。…それよりさ、
その封筒の中身って漫画？」

健「そうだけど…」

綾「読ませてよ」

健「えー…」

綾「いいじゃん。助けてあげたお礼ってことで」

健「うーん…」

健、しぶしぶ綾に封筒を手渡す。

綾「えへへ、やったー」

楽しそうに原稿を読む綾。

綾「えー、すごい。プロみたい」

健「そ、そう？ 持ち込みで酷評されたんだけど」

綾「私はおもしろいと思う。絶対いつかプロになれるよ！ あ、私、綾っていうの。また、漫画読ませてよ」

× × ×

○パチンコ屋(同)

健、お札を握りしめる。

健「俺…間違ってるのかな…」

○電車の中(夕暮れ)

健、電車に揺られ、夕日を見つめる。

○実家前の道路(夕方)

家を遠目から見立ち止まる健。

ばつの悪そうな表情で、ポケットから

小銭を取り出す。

健「コンビニでも行くか…」

背を向ける健。

母「健…？」

健、足を止めて振り返る。

のれんを下ろそうとしている母がほほ笑む。

母「やっぱり健じゃない。そんなところに突っ立ってないはいんなさい」

健「…」

○玄関

母「まったくもー、帰ってくるなら電話くらいしなさいよ。ごはん、あんたの嫌いな煮物しかないんだからね」

健「…」

健、靴を脱ぎながら家に入る。

母、足早に廊下を歩き、ダイニングへ移動する。

母「おなかすいてる？ もうすぐ店閉めるけど、それまで待ってられる？」

健、のそのそと廊下を歩き、ダイニングで立ち尽くす。

キッチンでばたばたしている母の背中を黙って見つめる。

健「待てるけど。店、もう閉めんの？ 昔はもっと遅くまで営業してたる」

母「お父さん、最近肩とか腰とか辛いんだって。夜はお客さん少ないし、早めに閉めてんのよ」

健「そっか…」

母「で、ごはん、待てる？」

健「別に。待てるってば」

母「あっそ。適当にその辺に座って待ってなさい」

母、足早にダイニングから出て行く。

健、よそよそしくあたりを見渡し、ソファに腰掛ける。

健「なんにも変わってねーじゃん…」

○同・ダイニング

健、母、父で夕食を囲む。

夕食は煮物しかないと言っていたが、唐揚げや刺身が並び、健の茶碗には米が盛られている。

三人は一言も話さず、テレビの音と食器の音だけが響く。

父「…ごちそうさん」

食器もそのままに、立ち去る父。健はその背を見つめる。父がゆっくり階段

を上る音がする。

健「ごちそうさま」

健、立ち上がり、自分の食器と父の食器まで下げる。

母、動きを止めて健を見上げる。

母「あんた、そんなことできるようになったの？」

健「皿下げただけだろ」

母「昔はしなかったじゃない」

健「もうガキじゃねーんだってば。：それよりさ、親父、なんかちっちゃくなっただけ？」

母「ばかね。あんたが大きくなったのよ。（手を合わせる）お粗末さまでした」

母、立ち上がり、食器を下げて、皿を洗い始める。

健「俺、親父に話あるんだけど、部屋行ってもいいかな？」

母「うーん、母さん、わかんない。ここところ、ごはん食べ終わったら部屋にこもりつきりだし。必要最低限の話しかしないのよ。最近唯一話したことと言えば、あんたの漫画が掲載された話くらいかな」

健「げ…。話したのかよ。母さんに報告するんじゃなかった」

母「あんた、子どものときからお父さん苦手だったもんね」

健「だから、もうガキじゃねーって。：でも、まあ、ちよつと行ってくるわ」

母「はーい」

健、ダイニングからでて、階段に上る。

部屋の前に立ち、ノックしようとするが、思いとどまる。

健「親父、ちよつと話あるんだけど。いい？」

父「…入れ」

健「…」

部屋に入ると、父が座って机に向かっている。

健の位置からはなにをしているかわからない。父は振り返らず、なにかしている。

健「あの…さあ…。(とても間を置いて)家、飛び出して悪かったよ」

父、黙って机に向かう。

健、何を話していいかわからず、その場で立ち尽くす。

父「なあ…健」

健「えっ…な、なに？」

父「漫画っておもしろいな…」

健「え、ま、漫画あ?!」

健、父に近寄り、机をのぞき込む。

父、振り返らず、漫画を書き続ける。

父「おまえの漫画、読んだよ。おもしろかった。打ち切り、残念だったな」

健、部屋の奥にある本棚で自分の作品が掲載された週刊漫画を見つける。

父「それで、感動してな。父さんも漫画描き始めた。こないだ出版社に持って行ったら酷い言われようだった。でも、おまえと同じ雑誌に載りたいって夢ができたよ。今ではおまえが饅頭作るのいやがるがよくのわかる…。(苦笑)」

健、父が描いている姿を眺める。眺めているうちに、健の目に涙がにじんでくる。

父「おまえの漫画はスゲーな。俺に夢見せれるだからよ」

健「親父のほうが、スゲーよ…。俺、まだまだ子どもだわ」

○家の外(夜)

綾に電話する健。

健「もしもし、俺だけど。…今朝の話だけどさ、悪かったよ。俺が間違ってた。やっぱり漫画続けるよ。それで、さ、饅頭の修行も始めることにする。大変だろうけど…。がんばるから。…で、さ、週末時間ある?よかったら実家に遊びに来ないか?そこから、二駅先だからさ」

受話器越しに、綾のすすり泣きが聞

